

## 文化講座「特殊研究講座」一覧

平成 19 年度

10 月 27 日（土）「ホスピスから学ぶいのちの教育」

めぐみ在宅クリニック院長 小澤 竹俊氏

平成 20 年度

10 月 1 日（水）「子どもの科学する心を育てる」

帝京大学教授 福岡 敏行氏

## 人間社会学部研究会・教員学術研究会（平成 19 年度）要旨

平成 19 年 9 月 29 日（人間社会学部研究会）

障害のある子を受け入れる保育

専任講師 石 井 正 子

保育所や幼稚園における通常保育の中で、心身に障害のある子どもたちの受け入れは徐々に広がっている。厚生労働省の調査によると、保育所については、平成 16 年 5 月現在、認可保育所 22,490 カ所のうち、障害児（特別児童扶養手当対象者）の受け入れを行っている保育所 7,200 カ所、保育所利用児童数 1,966,958 人のうち、障害児数 10,428 人（0.5%）にのぼる。

平成 19 年 3 月に保育者 243 名を対象に行った調査から下記のような結果を得ている。

まず、障害のある子を健常児とともに保育することについて、障害のある子どもたちにとっては 1. 様々な経験の機会が増える 2. いろいろな子どもと関わる機会が増える 3. 健常児から多くの刺激を受けることができる 4. 言語発達が促進される 5. 少しずつ集団行動がとれるようになる というような効果があると考えられている。また、健常児にとっては、1. 困っている人や立場の弱い人への思いやりが育つ 2. 人間の多様性についての理解が深まる 3. 積極的に困っている人を援助するようになる 4. 行動が遅い子やみんなと同じようにできない子がいても待つことができるようになる 5. 将来、障害のある人に偏見を持ったり差別をしたりしにくくなる というような効果があると考えられている。

保育するにあたって感じることとしては、1. 障害のある子の成長を実感し、やりがいを感じる 2. 先輩や上司に気軽に相談してアドバイスをもらえる 3. クラスの子全体の成長を実感しやりがいを感じる 4. 目が届かないところで事故が起きるのでないかと心配になる 5. どの程度まで、他の子と同じように行動させるべきか悩む というような内容があげられている。

さらに、必要な支援や配慮としては 1. 発達検査等のアセスメントの結果を保育に生かす 2. 保育カウンセラーや心理士等から個別にコンサルテーションを受ける 3. 上司

や他の保育者と緊密に連携を取り、園全体で保育に取り組む 4. 療育機関や相談機関と連携をとる 5. 園の中で事例検討会を行う等があげられている。

障害のある子どもたちを通常の保育に受け入れるにあたって、必要とされる支援や配慮については明確な基準がなく、保育者に対するコンサルテーション等の機会も十分に確保されているとは言い難い。障害児保育に関する実態を調査するとともに、障害のある子どもたちを保育の中に受け入れるにあたって必要とされる支援についてより具体的に明らかにしていきたい。

平成 20 年 1 月 23 日（教員学術研究会）

#### 幼児期から児童期におけるメディア・リテラシー教育の開発研究

専任講師 駒 谷 真 美

現代の情報化社会を生きる子ども達は、日常生活の構成に必要不可欠であるメディアと緊密な関係を保ち、現実世界とメディア世界に深く関与している。その結果、「メディア世界での体験は現実世界での直接体験とは異なる」感覚が希薄化し、「メディアの現実性」理解の問題が所在している。その解決には、「メディアと楽しく上手につきあう」ためのメディア・リテラシー教育（ML 教育）が必要となる。そこで、本研究では、Bronfenbrenner の「人間発達の生態学モデル」を基に、新たに構築した「メディアと子どもの生態学的環境モデル」に則って、幼児期では家庭環境を中心に子どもと保護者、児童期では学校環境を中心に子どもと教師、子ども同士の相互作用を通して、マイクロシステムにおけるメディア・リテラシーの育成を検討した。具体的には、家庭教育や学校教育の一環として、「メディアの現実性」理解目的で、メディア・リテラシーの基礎能力「メディアの特性を主体的に読み解く力」に焦点化した ML 教育の入門教材を独自に開発し、実証的評価研究を行った。

研究 1 では、日米の 3・4・5 歳児の保護者を対象に、親子共同視聴時における積極的媒介と保護者のメディア観を質問紙で尋ねた。研究 2 では、保護者用 ML 教育入門教材 C（ガイドブック：テレビ日記・番組のタイプ理解・CM の意味や仕組みの理解・テレビの現実性理解・暴力性の理解の 5 部構成）を開発し、家庭での ML 教育を実践した。

続いて、研究 3a では、教師用入門ビデオ教材（CM やキャラクターグッズの商業的意図や仕組みを知る探検①とアニメ・ドラマ・ニュースにおける「メディアの現実性」を考える探検②の 2 部構成）を開発し、学校での ML 教育を実践した。

研究 4a では、CM 理解に特化した単元計画の前段階として、小学 1・3・5 年生を対象に質問紙とインタビューを実施した。その結果を「日本の小学生における CM 理解の発達モデル」として集約した。研究 4b では、このモデルを基に、「CM と楽しく上手につきあう」単元を現場教師と共同開発した。ワークショップを実施し、評価基準を設定し、1・3・5 年生を対象に授業実践した。

研究 5 では、「メディアの現実性」理解に特化した教師用入門教材（ビデオとガイドブック：アニメ・アクション・ドラマの 3 部構成）を開発し、低学年を対象に、プレポスト

デザインの統制群法による実践をした。

以上の結果を考察し、「メディアと子どもの生態学的環境モデル」と照合し、理論と実践の均衡が取れた包括モデルを目指した「ML教育と子どもの生態学的環境モデル」を構築した。

### 平成 19 年度 初等教育学科 卒業論文題目一覧

- |   |         |
|---|---------|
| ○問題行動と嘘の関係性 ―その原因と対策を考える―                                     | 大 部 恵 美 |
| ○読書をきっかけとしたコミュニケーションを活発化させる教師の支援の方法                           | 小 野 緑   |
| ○児童の思いやりを育てる指導方法の研究 ―学級経営の視点から―                               | 河 口 真 穂 |
| ○図画工作科における児童の表現活動を重視した指導のあり方<br>―小学校上学年児童の発達段階の指導に視点を当てて―     | 木 下 真 理 |
| ○国語科におけるメディア単元の実践研究   | 小 林 晃 子 |
| ○ごんぎつね研究 ―文学作品と国語科教材の二つの視点から―                                 | 笹 木 ひかる |
| ○子ども自らが自然認識を構成する理科学習に関する基礎的研究                                 | 佐 藤 慎   |
| ○特別支援教育に関する研究<br>―軽度発達障害児のよりよい成長を促す指導方法―                      | 関 根 理 恵 |
| ○算数科における少人数指導の現状と課題<br>―一個に応じた指導を目的としたガイダンスの提案―               | 瀬法司 梨 乃 |
| ○小学校での食育推進について<br>―給食指導と各教科等における食に関する指導内容の充実を考える―             | 田 中 朋 美 |
| ○キャッチボール型言語コミュニケーション能力の育成<br>―小学校低学年における「話すこと・聴くこと」の関係性に着目して― | 塚 脇 典 子 |
| ○小学校における健康教育のあり方<br>―体育と食に関する指導を中心として―                        | 土 田 祥 子 |